

Living the Lotus

New Year's Issue

Buddhism in Everyday Life



『反省創造しよう』

立正佼成会会長 庭野日鏡

コロナ禍は、人間が真に大切にすべきものは何かを見つめ直す機縁



あけまして、おめでとうございます。


昨年は、新型コロナウイルスの感染が^{ひろ}拡がり、日々の生活に大きな影響を及ぼしました。感染によってお亡くなりになった方は、全世界で約百六十万人を数えます。衷心より哀悼の意を表したいと存じます。

本会は、万全な予防策を講じるため、大聖堂をはじめ各布教拠点を開鎖し、諸活動を中止、または延期としました。

また、個々人の日常生活においても、働き方、教育、育児、介護、家事などのあらゆる場面に、これまでとは異なる対応が求められました。

収入が大幅に減ったり、失業や廃業に追い込まれたりした方も多数おられます。こうした時こそ、善き友・サンガとして、思いやりの心で、協力し、助け合っていきたいと願っています。

このコロナ禍^かは、人間が真に大切にすべきものは何かを見つめ直す機縁でもあると受けとめています。



以前、「省」という字には、省く、省みるという二つの意味があるとお話ししましたが、コロナ禍の生活を通して、何を省くか、何を省みるかということが、改めて浮き彫りになってきていると思います。

ある調査によると、新型コロナウイルス流行の影響によって、自分自身が新しく始めた生活習慣や行動はあるかを尋ねたところ、最も多かったのは、「家族を大切にしたいと思うようになった」(74%)という答えであったそうです。一方で、家庭不和が深刻になったり、いわゆる「コロナ離婚」に至ったりするケースも増えています。

こうしたことを踏まえ、私は「令和三年次の方針」を次のようにお示しました。

昨年は新型コロナウイルスの感染拡大により、私たちの生活スタイルに変化が起きました。外出自粛、在宅でのテレワークなど、家で過ごす人が多くなり、家庭の大切さが問われました。

今年、本会は創立八十三周年を迎えました。昨年同様の自粛生活が続くことでしょうが、信仰生活を通して、お互い様に、夫婦として、父母として、親として、未来を担う幼少年・青年達を如何にして育て、人格の形成をはかるか、如何にして家を齊えていくか、創造的に真剣に務めて参りたいと願っています。

ここでの「夫婦」とは、若い方々を指しています。「父母」は壮年の世代、「親」は老（おゆ）に通ずることからご高齢の方々です。それぞれの経験を子や孫はもちろん、息子・娘夫婦に伝えるなどして、各世代の人が幼少年・青年達の育成に力を尽くしてほしいという意味合いを込めました。

この「方針」について、昨年11月の「教団幹部会」で、全国の教会長さんに説明する機会がありました。その際、東洋思想の泰斗として知られた安岡正篤先生のご著書を引用して、大要、次のようにお話ししました。

家庭で子供は、父に敬を抱き、また敬を求める。母を愛の対象としている。敬するとは、自らを敬し、人を敬すること。より高きもの、より大いなるもの、偉大なるものに対して生じる心、つまり進歩向上の心である。

しかし昨今、母の愛が強調されて、父の敬がなくなっている。父親自身も、仕事中心になり、あまり家庭を顧みようとしない。家庭を休息所のようにとらえ、だらしのない姿を見せる。これを恥じることで、自らを律する規律が生じる。「敬」と「恥」は、人間として根本的に大切なものである。

子供は、清く、明るく、^{すこ}健やかなものである。そして子供は、何より親の姿から学ぶ。親の健全ではない姿、つまり悪縁に触れると、将来に悪影響を及ぼす。それゆえに本来の父母の役割を取り戻さなければならない。

そして最後に、「父は子どもの尊敬の^ま的でありたい。母は子どもの慈愛の座でありたい。なぜかなら、家庭は子どもの^{なわしろ}苗代だから」という言葉を紹介して、締めくくりました。

このことは、私たちが常に心して取り組むべきことです。本会においても、布教活動に熱心になるあまり、家庭が顧みられないことがありました。これからは、布教も大事、家庭も大事という精進のあり方が望ましいと考えております。

未来を担う幼少年・青年達を如何にして育て、人格の形成をはかるか

これまで私は、皆さまに、人を植える（育てる）という^{こんぼんめいだい}根本命題に全力を尽くしていきたいと申し上げてきました。

その一番の根っこは、家庭での教育です。^{せい}齊家（家庭を齊えること）を通して、^{しつけ}しっかりした人間教育、躰がなされてこそ、学校など公での教育も充実し、本当の意味で「人を植える」ということに結びつくのであります。

そして、現実に家庭を齊えるには、「ご宝前を中心にした生活」と「三つの実践」（家庭で朝のあいさつをする。人から呼ばれたら「ハイ」とハッキリ返事をする。^{はきもの}履物を脱いだらそろえる）が重要であるとお話ししてきました。こうした基本を身につけることで、人間教育の^{そし}素地ができあがるのです。

また、家庭で青少年育成を進める上で、最も基本的なこととして、親が子供をどう見るかという「児童観」が大事な問題であります。

古来、日本には、子供を神仏からの^{さず}授かりもの、^{たまわ}賜りものとして、^{いけい}畏敬の念を持って迎え、育てる文化がありました。

以前、敬和学園高校（新潟県新潟市）の初代校長であった太田俊雄先生のご本を読ませて頂きました。クリスチャンの太田先生は、幼い頃、病弱で、よくいじめられたそうです。そんな時、お母さんがこう慰めてくださったといひます。

「あんたはな、体が弱いから、気も弱い。だがな、今に見ていなさい。立派に成人して、神さまの宿題をやりとげる日が来る。その日が来るのを信じとるから、お母さんは、ちっとも悲観せぬ。弱い時は、泣かされておればよろしい」

太田先生は、こうしたお母さんの信頼に応えることが、青年期以降の一貫した念願であったと振り返られています。



わが子に「神様の使命がある」と信じ、尊重したお母さんの姿に胸を打たれます。「親の背を見て子は育つ」といわれるように、良いことも、悪いことも、親のなすことすべてが、子供に影響します。

昔、中国にいた謝安^{しゃあん}という政治家の逸話^{いつわ}があります。教育熱心な奥さんが、「どうしてあなたは、一向に子供を教えようとなさらないのですか」と訊ねたのに対して、謝安は、こう答えたそうです。「私は、四六時中、子供に教えている。口や手でやらぬだけのことで、体全体で教えているつもりだ」と。口やかましく言ったり、躰だといって手で叩いたりするのではなく、日常の姿を通して手本を示すことが、子供の教育の基本ということでもあります。

さらにこんな逸話もあります。戦国武将として知られる細川幽斎^{ゆうさい}は、晩年、壮年になった息子が来た時は、くつろいだ態度で接していましたが、幼い孫が来た時には、ちゃんと姿勢を正して会ったそうです。家老^{かろう}が理由を聞くと、こう話したといいます。「孫はこれからものになるのじゃから、こちらも敬して会わねばいかんのだ」。

わが家においても、生前、開祖さまは、ご供養の時間から、本部に出かける時間まで、毎日、同じリズムで過ごされてきました。私たち子供は、朝夕のご供養に間に合わず、遅れることもありましたが、開祖さまは、いつも決まった時間に始められました。それを、ごく自然になさる姿を見て、「本当に教えを信じているのだ」と心から思いました。開祖さまも、体で教えてくださっていたのだと、いまつくづく思います。

このように、子供の育成といっても、結局は、親の自覚と姿勢が問われているのであります。お互いさま、自らを振り返り、反省をしながら、未来を担う幼少年・青年達に、よりふさわしい後ろ姿を示していきたいものです。

情感豊かな、思いやりのある人を育てることが、本当の意味の人づくり

さて、本年三月十一日、東日本大震災から十年を迎えます。いまでも避難している方は、四万人を超えています。原発事故によって故郷に帰ることのできない人も大勢います。私たちは、常に何が大事かを問いながら、被災した方々に心を寄せ、それぞれの立場で応援をし続けていきたいと思えます。

震災の際、私は、「一年計画ならば穀物を植えるのがいい。十年計画ならば樹木を植えるのがいい。終身計画ならば人を植えるのに及ぶものがない」という中国の古典を引用して、より良い地域社会を創造するには、何よりも人づくりが大切であるとお話ししました。

知性や理性だけでなく、人の心の^{きび}機微の分かる情緒や情理を^{そな}具えた人、思いやりのある人を育てなければ、本当の意味の人づくりにはならず、心豊かな社会も築けません。

道元禅師の言葉に、「自ら未だ^{みづか}度ることを^{いま}得ざるに、^{わた}まず^え他を^{わた}度す」とあります。迷ったり、苦悩したりしている自分でありながらも、困っている人を見たら、何とかしてあげたいという慈悲の心を起こす。自分だけの幸せではなく、皆共に救われていくよう力を尽くす。それが菩薩の心であると教えられています。

つまり、佼成会の「まず人さま」という言葉に示されるような情感豊かな人を育てることが、夫婦として、父母として、親として、また本会のサンガとしての役割であります。皆で力を合わせ、この根本命題に取り組んでいきたいと思えます。

そして、この一年、家族の^{きずな}絆、サンガの絆を深めることを通して、互いに助け合いながら、目の前の困難な状況を乗り越えてまいりたいものであります。

(『佼成新聞』令和3年1月3日号より)

